〔類聚名義抄八竹〕簦音登、俗云大笠、オホカサ、トリカサ、カサ、　大簦オホカサ

〔伊呂波字類抄雜物〕笠長柄笠オホカサ

〔運歩色葉集賀〕笠菅カサ　簦同

〔東雅九器用〕笠カサ　簦チホガサ　カサの義不詳、笠にして、柄あらむには、卽今のカラカサといふもの、類なるにや、其制の如きは知らず、古畫に蘭笠の如くにして、大なるものに柄あるを繪がきしを見たりき、夫等のもの、大笠といひしものゝ制にやあるらむ、不詳、

〔倭訓栞前編六加〕かさ略○中　倭名抄に、簦を俗に大笠といふと注せり、今だいがさ、たてがさといへる物は、大の字音をよび、たては大傘地に立べきをいふなるべし、西土にも竪笠の名あり、

〔古今要覽稿器財〕おほがさ大繖屏繖　おほがさは今の世の日傘なるべくおもはる、その形狀は玄たしく見る者ならねば、委しくは辨じがたし、されども大方は、かの伊勢物語に、富士の山をなりはゝほじりのやうになんありけるとあるを、朱雀院の塗籠御本には、此山うへはせばく、しもは廣くて、大笠のやうになん有けると有にて、凡は其さま玄られたり、但日傘といへる名は、宗五大艸紙にみえたる外に、古くはいまだみあたらず、されど延喜式内匠寮宮裝束に腰輿一具、屏繖二枚と見え、和名鈔服玩具に唐令云、腰輿一次大繖四、本朝式按に延喜式なるべし云屏繖と記され、また唐書儀衛志云、天子出、大繖二、執者騎、横行居衛門後と見えたるなど、皆日傘なるべくおもはる、雨天の料にくらぶれば、殊の外華麗なるものなり、多く絹にて張たる歟、色目に制度ある事は聞えざれども、大方緋をもちふるにや、西土にては色の制度あるよし、世々の國史に見えたり、海山記に、帝與楊素釣魚於池坐赭傘とみえ、韓退之遊青龍寺詩に、柿の紅葉せしをたとへて、赫々炎官張火傘などもいへれば、緋傘常用の物と見えたり、又按に、山城國南禪寺に、龜山院の御腰輿御屏繖ありて拜見せしが、いかにも美麗なるものなり、寺